南極探査ツアー

Antarctica Exploration Tour

古 里 明 瑠
Akaru Furusato

EICA 名誉会員

1. はじめに

旅行を趣味とするようになって，南極は憧れの地であったが，現役時分には仕事に関係することもなくリタイア後も，時折，南極観測の昭和基地からのニュースに触れるだけの地であった。

南極大陸は，赤道直下のゴンドワナ超大陸から分離して，現在の南極の位置まで移動したとされていて，万年氷下の地下には石炭なども埋蔵されているが，1990 年日本の主唱で締結された南極条約により，各国の領有権は認められないことになっており，採掘なども一切禁止である。日本の約 37 倍の面積，氷床の厚さは最深部 4770 m，最高山は 4892 m。

2. 手続きが大変

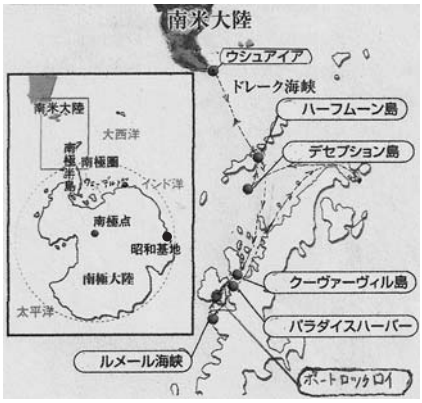
そのような折に，ノルウエイの海運会社が，南半球の真夏だけ，一般人でも参加できる南極ツアーを始めたというので，早速申し込みをすることになった。申し込みにはいくつかの関門が。先ず第一は，環境省の事前許可が必要なこと。第 2 が主治医の健康診断書が必要なこと。第 3 は，かなり高額の傷害保険への加入が要ること（船医の手におえない傷病時の保険）。第 4 が催行人員の不足。

3. 探査ツアー基地ウシュアイア；クルーズ船 MS フラム号

2012 年 1 月 11 日　成田発，アメリカのアトランタ経由でアルゼンチンの首都ブエノスアイレス迄 26 時間，とにかく南米は遠い。1 日市内観光で体調を整え，翌日更に国内線で 3 時間半，南極探査ツアーの基地ウシュアイアへ。マゼラン海峡を越えたアルゼンチンの最南端フェゴ島にある人口 7 万の北欧調の漁港都市。真夏とはいえ，高緯度なので冷涼で心地よい。夕方，南極探査ツアー船 MS フラム号に乗船。1 月 13 日 16 : 00 出航，いよいよ 9 泊 10 日の南極クルーズ開始。

フラム号は，総トン数 12.000 トン，全長 114 m. 全幅 20 m，8 層構造で客室は 3，5，6 デッキ，4 デッキがサービスヤードで，売店，事務窓口，映写室，講義室，船尾が食堂。7 デッキに展望大ホール，プール，サウナ，トレーニングジム。8 デッキには，屋外展望台，救命ボート。船長室は 6 デッキ最前方。エレベーター 2 基，客室定員 318 人。乗組員は，操船員のほか探査ツアー科学隊員を入れて約 100 名。

船内は乗船時に渡された乗船カードで，買い物などのサービスも，健康管理や乗下船も全てコンピューターで管理（下船地で取り残されると，死に直結するので，常時肌身離さず厳重な管理）。乗船後すぐに，義務となっている救急訓練。水温が零度前後なので，ライフジャケットを付ける前に，全身つなぎの保温スーツを着ることを徹底的に訓練。また，探査ツアー隊員（科学者）の紹介と義務講義（何も持ち込まない，持ち出さない等南極ルールの講義）。夕食は，船長主宰のディナーパーティ。ビーグル水道の航行なので波も静か。ウシュアイアの街に別れを告げながら，のんびり過ごして自室へ。船室は，奮発して 6 デッキの窓側を予約したが，バス，トイレ付の中級都市ホテル並み。



ルートマップ

4. ドレーク海峡　唸る 40 度，叫ぶ 50 度，悲鳴の 60 度

南米の最南端と南極大陸の最北端の間 1600 km は，暴風圏で荒れる海として世界的にも有名なドレーク海峡で，1 月 14 日明け方から 15 日夜半，南極半島にたどり着くまで，約 2 日間は，タイトル通りの荒れ方で，フラム号も木の葉のように揺れる。6 デッキの窓よりも高い波が船側にぶつかり，生まれて初めての荒天の航海で肝を冷やす。荷物はもちろん，メガネなども括り付けておかないと，吹っ飛んでしまう。食事は，食堂まで，手すりにつかまりながら，出かける。酔い止め薬を飲んで，どうにか耐えるしかない。乗客の半数ほどは，部屋から動けない人もいるようで，食堂はすいていた。

5. 雪山の南極半島，ハーフムーン島 ひげペンギン 50 万羽

南極半島と付属諸島の間は内海状になっていて，昨日までの荒海がうそのようである。南極半島は，昭和基地の写真等からイメージしていた大雪原が果てしなく広がっている風景とは真逆で，険しい高山が連綿と続いていて，2000 m 超えの雪山に朝日が当たって素晴らしい眺めである。1 月 16 日昼過ぎハーフムーン島に到着。風は強いが晴れていて思ったより暖かい。貸与の特製長靴を履いて，消毒槽を通ってから上陸用

ゴムボートに分乗して上陸。この島は，ひげペンギンの営巣地で，丁度ひなが生まれたところで，親鳥の羽にくるまって，鼠色一色の産毛で可愛い。50万羽と言われるおびただしいペンギンは，もちろん初めて見たが，島の北半分ほどが，ペンギン，ペンギン，また，ペンギン，見渡す限りのペンギンに，圧倒される。5 m ルール（南極の動物との離隔距離ルール）があるのだが，人を恐れないので，ペンギンの方が近づいてくる。島を半周して夕方8時ころに引き上げたが，勿論白夜なので，いつまでも明るい。日の出 2:20，日没 23:51。アルゼンチンの観測所（無人）有。

6. クーバーヴィル島　ゼンツーペンギン：ルメール海峡南緯 65 度 12 分

船旅の良いところは，荷物や宿所を移動することなく，旅行が出来ること。寝ている間に，さらに南下して，1月17日クーバーヴィル島に到着。ゴムボートで上陸，ベルギーの観測所（無人）脇の露岩上で，ゼンツーペンギンが巣作り中。数はそう多くはなく1万羽程度とのこと。後背地のがけを登り，ビニールシートで尻スキーを楽しむ。さらに南下して，ピータマン島に接近，氷山が多くなり，その上にアザラシが休んでいる。フラム号は砕氷船ではないので，ルメール海峡のこの地点で南下をあきらめ，ゴムボートで，流氷の海をガリンコ船遊び。南緯65度12分，本ツアーの最南端到達点。

7. ポートロックロイ　郵便局，売店

反転北上して1月18日朝ヴィンケ島の英国観測基地ポートロックロイに到着。ここもゼンツーペンギンの営巣地があり，観測所の周りにも営巣中。

ここには，南極唯一の郵便局と売店があり，航海中の唯一のショッピングチャンスと有って，女性陣が意気込んで買い物。当方は絵はがきを買って自宅宛に投函。

8. 南極本土への上陸　パラダイス湾

これまでの上陸地は付属諸島であったが，1月18日午後，ポートロックロイ対岸のパラダイス湾で南極本土に上陸。格別変わった風景があるわけではないが，南極大陸に踏み込んだ感覚を味あう。

山，また，山の南極半島パラダイス湾を行く MS フラム号

ここもゼンツーペンギンの営巣地で，10万羽程度，まだ産卵には至っていない。好天に恵まれ，ペンギンをかき分け？ながら，周辺を散策。高台の営巣地は，登りは大変だが，下りは尻スキーならぬ胸スキーで滑り降りる溝が出来ていてペンギン専用ハイウエイ。ペンギンは，通常は水中での生活が長く，船上から，海中を泳いでいるペンギンをよく見かけたが，水中をまるで鳥が空を飛ぶようなスピードで自在に泳いでいた。営巣地には露岩（裸地面）が必須でそこに皿状に小石や海藻の切れ端を敷き詰めたのが巣である。露岩はアザラシの休憩場所でもあり，仲良く昼寝している。沖には，クジラも遊泳していて，時折水煙が上がり，湾名通り，のどかでのんびりした風景が広がっていた。

パラダイスハーバー（ゼンツーペンギン営巣地）

9. 南極半島北端：デセプション島

1月19日は，南極半島北端を廻りウエーデル（南極）海を臨むところまで航海。この付近には，島かと見まがうほどの大きな氷山が漂っていて，棚氷が流れ出たものという。風が強くて最北端への上陸は断念。反転して南下，デセプション島に最後の上陸。10年ほど前に噴火があったそうで，生々しい地層が露出していて，湯気の上がっているところもあり，地球が生きていることを実感する。

探査ツアー中には，数多くのペンギンを見掛けたが，ひげペンギン，ゼンツーペンギンがほとんどで，体長は，60 cm 程度。アデリーペンギンも同程度とされるが，さらに南部が営巣地とのことで，あまり見かけなかった。なお，皇帝ペンギン（体長 120 cm 位）は，大陸中心部が営巣地とのことで，南極半島では見かけなかった。

10. クルーズ船の楽しみ

今回のツアーは，探査ツアーという名称通り，科学者の隊員がいて南極に関する講義があり，映像もたくさん提供されたので，勉強になった。何しろ白夜なので，屋外探査活動も多かったが，夜には7デッキの大ホールで，ファッションショウや，氷の彫刻作りの実演，南極グッズのオークション，映写会，船長室などの船内見学会，等々イベントが盛り沢山で，飽きる暇はなかった。なお，通信事情が悪いので，電話やインターネットが出来ず，やや，不便であったが，毎日壁新聞が掲示され，英，独，仏語等と共に，日本語新聞もあって，重宝した。

11. おわりに

デセプション島上陸を最後に1月20日，帰路に。2昼夜のドレーク海峡の航海は，予測通り大荒れであったが，不思議なもので，往路の経験が奏功して，さほど恐怖感なしで過ごせた。

南極の自然は過酷ではあるが，真夏の白夜の季節は，ペンギンはじめ多くの生き物が活動して結構賑わっていた。また，思っていたより暖かで（日中 −3〜10 ℃），日中が長いので過ごしやすい感じであった。航海中に見かけた船は，調査船らしい僅か1隻のみ，最果ての地ではあった。

帰途，船長・探査リーダー署名入りの「Antarktis Sertifikat」に目を通しながら，南極の厳しくも手つかずの自然と，多くの生き物の生きざまに，環境保全の大切さを思い返しつつ，南極探査旅行を無事終了した。